

「これまで『政党間の合従連衡にはくみしない』と訴えていました。今回の新立憲民主党の結党は、過去の野党の合併とどう違うのですか。二つあります。一つは、これまで1年間、野党の共同会派として国会で活動してきたこと。もう一つは、先に新党の綱領案をつくり、賛同する皆さんが「一つの旗」のもとに集まる、というプロセスを可視化できたことです。

3年前の希望の党騒動で、当時の民進党が事実上分裂しました。野党が小さな政党に分かれたことで「政府に対する行政監視機能」がものすごく劣化してしまいました。立憲民主党と国民民主党という、衆議院で50人くらいの二つの政党が、国会の中で同じことを別々にやっていて、役割分担しきれなかったのです。

ただでさえ野党は人が足りないのに、このままでは力が発揮できない。それで、昨年の大連立のころから「夏の参院選後に共同会派を」と考え、実現しました。

希望の党騒動で、野党はお互いの違いを増幅するようなプロセスを取らざるを得ませんでした。しかし、野党第2党が希望の党から国民民主党に変わり、理念や政策が一定の幅にある、と判断できました。結果論ですけど。

共同会派で活動する中で、互い

新立憲民主党は 何が違うのか

安倍政治を継承するという菅義偉政権がスタートし、高い支持率を得ている。新立憲民主党はその陰に隠れ、期待感が高まらない。しかし、安倍政治的なるものを葬るためには、この政党が対立軸を示し、自公政権に代わる「選択肢」として認知されなければならない。それは可能なのか。

聞き手 尾中 香尚里

18ページ以外の写真撮影／本田雅和（編集部）

の理念や政策がずれていないと確認できました。「違う政党を無理やり一緒にする」のではない形でまとまると思いました。

合流に先立ち「新党の綱領案を先に作ってほしい」と注文しました。その結果、新たな綱領案に「この指止まれ」という形ができました。これも結果論ですが、3年前に「違いが増幅される」経験をしたことで、逆に何が共通項というか、何が旗印なのかを再認識できたのではないかと思います。

合流の理由として、新型コロナウィルスに言及しました。コロナ禍が合流の背中を押したのは確かです。私は、安倍（晋三）

さんの立憲主義の破壊は、安倍政権が終われば一定の揺り戻しはあるだろうし、回復は可能だと思っていました。でも国民生活はそうはいきません。一度経済や社会が壊れたら、回復は不可能です。「オリジナルの立憲民主党を時間をかけて大きくする」と悠長に構えるプロセスは許されないと感じました。

新立憲民主党結党で「過度な自己責任社会」vs.「互いに支え合う共生社会」という対立軸が明確になったと主張しています。

自民党の新自由主義的な色彩は、平成に入ってどんどん強まってきた、小泉政権で完全にかじを

切りました。競争を加速することに価値を置き、その裏返しとして自己責任を迫る。競争のためには規制は少ない方がいい、行政も小さい方がいいと。

一方の野党、特に1990年代から2000年代前半にかけての民主党は、こうした小泉的、新自由主義的な改革に「色目」を使ってきたことは否定できません。反省を込めて言いますが、私自身もそうでした。

しかし、東日本大震災、7年8カ月の安倍政権、新型コロナウィルスの感染拡大と続き、野党側が振り切れました。新自由主義から脱却し、支え合いや分かち合いを